

91.3.3
47
45

玄隱說

四十二

91
4
4

より、よく昔の名抄をて網又くぬき、
天台は有門空門亦有亦空門亦有非空門
非四門と有門の得道は具曇論よりなり、
空門の得道は成實論より明なり、亦有非空
門のゆたは迦旃延經より亦亦空門の得
道は毘動論よりなりとも、迦旃延經
毘動論も天竺より傳りて漢土は不
来、然りと大師有門空門の發はしていま
ど經論も又より事と未明よりなり、文毛
詩小雅の中は南溪白華々黍由庚崇丘
由儀の六篇は篇の名のともて詩の初ん
なり、是は逸待よりひりては網よりが失

より、これよりて東廣微よりひり人
詩を他と補亡の待と名付文選第十
よのせより、今の書はこれの書も作との
書中よりより、經凡六百卷の崩御とあ
らしていへり、昔の書の名はよこら、
玉振奇物の作者のゆゑ、凡上古の名賢の
中は缺のやうと人ちり、
中にも例多し、本朝神代卷なども多
し、又ぬきの道乃、
芳野川の河上の窟て人の川より入定り、
中波茶の經起より、
くても終を何より、

色どありて花鳥風月とりくわきぶ
とのいも仁義礼智信とあしりて人乃
善惡の教あり又天台空佛性と亦有亦
空門乃四門を底よりあして盛衰必義の
理をわたり桐森の淨門より初より
分業上源氏一教の弓法業を混ちり
以てよんていまくれへ只此心とりて諸
人は佛通ととりて人の善惡物類の善惡
とりよととりて天台兩立四教一ニハ三教
教ニハ通教三ハ別教四ハ圓教也
内三教ハ家内の事と教ハ通教ハ家内の
理と教ハ別教ハ家内の事と教ハ圓教

ハ家内の理を教ととりて是法流也深
の法身也是ハ法門のなり源氏のみよあ
らば四教ハ花嚴阿含方等經法華
涅槃五時を以てして法流ととりて四教
ととりて六なりとも涅槃を法花よ入り
法相よハ又時を三よ分て四教よ門空
門性も性空門亦有亦空門をわたりて教
のつれりも四なりともとりて分て
是内ハ三教教よ門のなり通教に空
門圓教よ性も性空別教よ亦も亦
空なり
又曰涅槃の自宮卷乃獨は述云法事

雲隱と名付く少万葉の奇なり
有る名実事天竺四門は摩訶之土河海
空船中事有源氏物語中此物語人物
浪多れん空道也又以延喜者能諱也
雲隱中道也秋多る時教と因此物語
亦人意へ又ふ十四帖皆亦空く意へ
又源氏雲隱之後修藏院は信乎もも
王と云ふ又亦亦空く

此物語先書好色道終亦佛道之意可見
水波之聲公有之又云雲隱之事此物語中
貴人義色等無常抑衰情多定自桐葉
至葉上既本盡了故光源氏終焉不

定也若書之者可言悟道勢也又無私記
仍雲隱卷之中諫之也云々幻卷與此
卷之乃九年なり一葉の年幻也
まてみぬ六十一り十四葉中九年

愚案此唾花の伝へ河海花鳥乃両
抄を合を交へてあるなり
大なりく取らしめて河海花鳥抄
分言わくあるなり及びもとの細
流の雲隱乃以後又河海花鳥よりあ
りなり無津抄の雲隱乃以後又
是れこの両抄なりをあるなり
さうらゝ好事の字をたふあり

河
一 雲隠れと名づくあり

世をい事しりあり一 只名とりてその心を
影をかりば名をてしてふ業流ひり隠れぬ
ふ心ありて此詞作集ゆと般あわれ
とと万葉集よ人の逝去とるを雲隠
きとつり

万
一 ユゲノワラニコラセ
弓削皇子薨時置始東人哥

又君々祐ゆりし海をばわ雲のひか
への下にくれまぬ

万
一 ヌネトモ
大伴皇子被死時作哥

白
一 つくの岩根の池よ為鴨をう人の

万
一 キ
ふそや雲隠れちん

神龜六年元大臣長屋王賜死之時作哥

万
一 万
大君の足こころこもぬあつごの時よは
わくねど雲隠れま

天平七年新羅尼理願死を時大伴弟女悲
嘆作哥

とめえぬ命ゆわれぬあめのあしりか
て雲をくれしことのかちあしり作とこよ
とば網を 逝去のまよあふかむ

幾ぐりあひくもやとれぬわあま
雲がくれし相すし月くれ

一 名ぶらりともろく巻をうぬま

天台所立四教

三藏教 通教 四門 有門空門非有別教

非空門亦有亦

門有門乃得道昆曇論空門明道八成實

論は明より非有非空門之迹論經は説

亦有亦空門ハ昆動論はゆきりといふがこ

とは經論天竺よきしりて漢およは栴

婆流よりと大師有門空門の義ありり

ていしと經論をさるる四別二教と刺

し多ふ不思議をかり今の雲くれの是

も作者の胸中にとゆりて世に傳

ふや如き人論より天台宗流傳し

わつといふは經論の卷の名よこめり

根甚深よりや凡上名名賢の中は終

義深は不可説と
不可謂之此例不
當

のうと人ありたりと大師以下も例

多し奉朝神仙傳なると多く見

たり又ぬきの乃先達業奉朝臣方野

川の河上乃窟てんの川は入定しをりよ

一徳宗の縁起よ是と云

天台宗頓滅之事

黃帝の天にのがりには擬もると中右

の先達やとをり抱くうりのかりては所見を

し今案と云くくくり宿本の考よ八卷大

師の祠よ故院失多ひて後三三年才来に

せとそひさ多ひ一巻院流ふも六卷院よ

とさうのぞく人の心まこめりといふ人

義以河之改正裁也

花

作りつらといふ。世をのづれく破滅後より
陽春よりやしてさうしより。且雲りこれの
巻とくく一帖とて人々その巻中の久遠ん
りりり。其回より朱雀院其の文致は其
政大臣賢黒大臣下の人々多くせられ
たり。何とて朱雀院より破滅より破滅
みや。又其の文章中御幻巻の文章に
幼稚とみより。十四歳より自其の巻に
これえ服あり。中將侍後とてくより。是ふ
みく。思ひ合をてり

よりりて雲隠れとて名付作り幻巻を
終り紙年の用とてまうり。其後より朱雀
院の形滅よりその巻よりまうり。作り
紫明抄より作り。若年巻より朱雀院世
をそのひき。終り二三年より。その院より
陽春よりまうり。てくこれ。其朝より破
滅のもの河海よりやがれをりり。ね。幻巻よ
り。意をぬく。朱雀院の内より。自其の巻の始
より。作り。これより。後より。其朝より。自其
巻より。作り。十四歳と。故より。意をぬく。其より
十三より。そのる。八ヶ年の。その。御給の。面より
は。是より。作り。作り。作り。雲隠れの。巻。其。中

義毛詩序九

南後ハ孝子相成テ

以養也

白華ハ孝子御息

華恣ハ特祀歳豊

ニ空黍稷也古其

義而王其辭也

由庚ハ万物得由其

道也

崇丘ハ万物得極其

高大也

田儀ハ万物之生各得

其直也

よまごの禮よ三三年海居しては後崩

決り多しと母老よ初めりておまろ決

つとく柝母老の名つりてして初とる但

も天名の四教乃法門を例よりしれど

夕代物をささ地しゆり依書をとりてい

く毛詩の小雅の中に南後白華を恣

由庚崇丘由儀の六篇ハ篇の名のそあり

て綱いなりそハ逸詩といひてりとい綱を

いからせさるそいなりて東唐傲といひ

一人綱とゆりて補志の物と名付て文

選の才十の巻よりせり朱晦庵古詩

詩といひと樂曲の名をれんその綱を

りといひありてと根と根しゆりいそ海

篇の名のそまろその綱をそとて回し

愚按細流乃雲流の山流し味死の夜

と畧しそありそ似たりそと白老の

流よまろそゆりゆり今そいそい

意自六氣至十三氣ハケ年のそ漏脱し

以九ケ年のそ可在雲流卷之中也其故

ハ幻卷ん九ふ以卷ハ七也ハ中間ハ才六

雲りられといふ老の部号とまろ実りハ

そ老と不書是則昔老の少例之

源氏一世之行状徳厚ク譽高ク才智人ニ勝

し棠花世ニ起たり哉ハ其身終之を換昔

義

道ノ儀ヲ以テ不可符合也。司馬迂班固范
曄温公モ筆力不可及。緇或木食草衣隱
道修行之儀雖如佛在世之時。其奇
特。若又現神變不思儀者。人不可信之。或
入滅之時。聖衆如星列紫臺ノ雲ヲ引テ親
乘遊ノ相ヲ示シ。モノレハ月。馳テ尋常ノ物
語ニ似タルヘシ。夫悲ヲナシ。五十二類悲諦啼
泣ノ想ハ佛ノ涅槃ニ尽ヌ。ハ是亦事四アリ。
若又登仙換骨シテ共骸骸不留ト云トモ
頗可似虚誕。依之同文取不及一言之。却
而盡善盡美者也。

惣別此物語哀傷及教人桐壺更衣夕鳥

上葵上柏木六条。漸息所紫上大君等也。

薄雲 桐壺帝 本ニナシ私入之ヲ

是等ニ皆事盡ヌシハ大方ノ筆力ニテハ不
可符合也。云此上ヲモ一廉ノ文章ヲ耀ス。

中筆ハ式部ガ手ノ内ニ有トシルベシ。筆不友
ノ文ヲ闕ストハ不可見。一切ノ事不言之。如
妙處アリト云事ヲ示ス也。維摩一默則
千言万答是也。猶河花ノ夜啼花ノ夜ふら

愚案ニ世ノ源氏物語ノ六十四帖ノハ

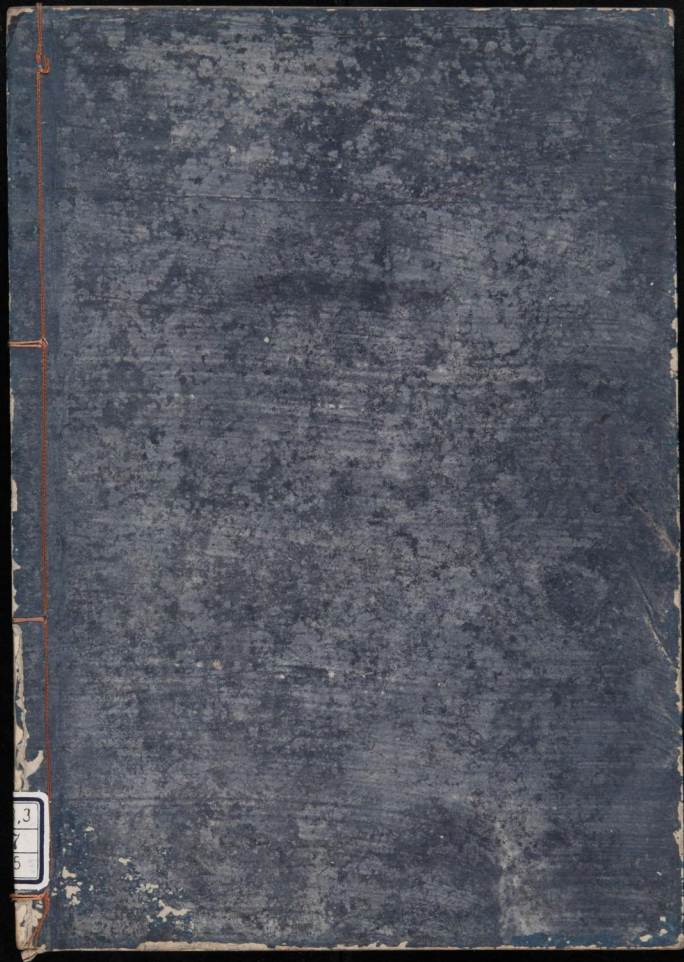
ありて只六十四帖あり。雲隱乃志

名づりわりのそと組とりのそと

そ中よわくわくそとそとそとそと



9/3.3
47
45



3
7
5